

平成 22 年 6 月 14 日現在

研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18402043
 研究課題名（和文）グローバル化のもとでの人間形成の総合的研究
 ～中央アジアとコーカサスの現状と課題
 研究課題名（英文）Educational reform in Central Asia and the Caucasus in globalization

研究代表者
 関 啓子(SEKI KEIKO)
 一橋大学・大学院社会学研究科・教授
 研究者番号:20107155

研究成果の概要：

グローバル化のもとでの国民教育制度の特徴が、構築過程にあることを解明した。コーカサスと中央アジアの諸国をめぐる内外の教育改革研究において欠落していた視点（移動と紛争）を見出し、比較研究の新しい枠組みを仮説生成的に浮上させ、人間形成過程全体の研究と社会関係資本の考察が重要であることが、明らかになった。また、当該地域におけるソビエト教育の継続と断絶について明らかにすることができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2007 年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
2008 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
年度			
年度			
総計	12,300,000	3,690,000	15,990,000

研究分野：比較教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：人間形成、中央アジア、コーカサス、グローバル化、教育政策、教育をめぐる国際協力、バナキュラーな価値、トルコ

1. 研究開始当初の背景

南コーカサス三ヶ国と中央アジア諸国は、ソ連邦の解体に伴って独立し、国民教育制度の構築に着手した。独立後 15 年以上が経過し、制度設計・実現が軌道にのり始めたのを見計らい、グローバル化のもとでの国民教育制度づくりの特徴を解明するための研究計画を立てた。

独立した 15 の国家の中から、アジアとヨーロッパの架け橋として注目されるコーカサス諸国と、世界の強国が影響力を拡大しようとする中央アジアを選択した。いずれも、紛争の火薬庫とみなされている地域圏である。

2. 研究の目的

(1) 国民国家がつくられ、そのもとで設計された国民教育制度と、グローバル化のもとの国民教育づくりは大きく異なる。この相違を解明することが、第一の目的であった。国際機関やNGOや大国が影響力の拡大をもくろみ、援助や教育開発の名目で働きかけを強め、現在もそれは続いている。グローバル化のもとでは、かつてのソ連の影響から解放された独立国家も、自らの人づくりの理想を掲げる間もなく、西洋の教育思潮に吸収されるのであろうか。国家内の階層や民族をも巻き込んで、内外のパワーがないまぜになりアリーナ化した教育制度策定過程と実施状況を明らかにすることを目指した。

(2) これらの調査対象国は、1991年まではソ連邦の構成共和国であり、ソ連の教育政策によって教育の近代化を果たした。ソ連の教育思想、教育政策、学校教育の中身（教授過程と学習形態）、学校外教育の位置づけと指導形態および活動内容などは、ソ連時代とどのように異なるのか、あるいは異なるのか、これらの点を明らかにすることが、第二の目的であった。すなわち、ソビエト教育学の継承と断絶をめぐる実証的研究を目指した。この作業は、ソビエト教育学を、教育をめぐる人類史に位置づけるための予備的な試みでもある。

(3) 加えて、研究対象国への外からの影響として、特に元の宗主国ロシア連邦とトルコの働きかけを読み解くことが、第三の目的であった。さらに、アメリカからの資金を用いてコーカサスの欧米化に尽力する団体（PH International）の活動とその成果の原因を解明することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 実証的な調査研究を行い比較するという手法を用いた。大きくは、コーカサスとい

う文化圏と中央アジアという文化圏を比較し、さらに、その内部の国家間の比較を行うという重層的比較の手法を試みた。

(2) 初等・中等教育機関、図書館や子どもの創造の家などの学校外教育・文化施設、各種の宗教施設を訪問し、教師、運営者、利用者などに対してインタビュー調査を行った。

(3) 類似した問題関心をもつ優れた先行研究者との面談を行い、意見を交換した。影響力の強いマス・メディアやエスニック・メディアでもインタビューを実施した。

(4) アイデンティティ構築の日常的な資源としての景観に注目した。また、民族博物館の展示に自画像を求めた。

(5) 歴史的アプローチも援用し、地域間、民族間、国家間の関係史を把握した。その際、資料・文献を渉猟した。研究全体を通じてインターネット情報も収集した。

4. 研究成果

(1) クルグズスタンとグルジアを調査することによって、民主化ドミノを構成したグルジアとクルグズスタンにおける教育改革の差異を明らかにすることができ、翻って、両国の指導者と一般の人々の目指す方向の違いをあぶりだすことができた。コーカサスと中央アジアの比較研究は国内外で取り組まれることが乏しいこともあり、重要な成果と思われる。いずれの国も政変あるいは紛争後に訪問することになり、生々しい実情と複雑な民族間関係を把握することになった。

(2) コーカサス三ヶ国（アルメニア、アゼルバイジャン、グルジア）と中央アジアの三ヶ国（クルグズスタン、カザフスタン、ウズベキスタン）を訪問し、欧米化の波が、一つには、教育の国際標準化（PISA やボローニャ・プロセス）といった、あらがいがたい優越性を纏ったパワーとして、二つには、支援・援助による教育政策の方向づけという方

法で押し寄せていることを明らかにした。特に、支援と援助のあり方が、大人の学習の形態と社会活動に影響を与えるメカニズムを析出できた。

(3) アルメニア調査では、ディアスポラの学校支援が独自のバナキュラーな価値の伝達の実現に連動していることを析出した。教育のグローバル化のもとで、経済・社会の現代化が進行した地域でのバナキュラーな価値とその伝達についての実証的な研究例はほとんど見られず、バナキュラーな価値がどのような歴史的経緯でどのようにつくられ、再構築され、伝達されているかの析出は、学問的な意味が大きいと思われる。

(4) 中央アジア、特にクルグズスタンとカザフスタンでは、学校教育へのトルコの影響力が強いことが実証された。両国で活躍するトルコの支援団体は異なることも明らかになった。トルコからの支援が、なぜクルグズスタンやカザフスタンの人々に好まれているかを考察することによって、両国の人々の教育意思のありようを浮上させることができた。両国でのトルコ・リセの発展は、よく言われるように、イスラームに直接な原因があるのではない。また、トルコの影響を受容したのは、独立当初トルコが近代的に見えたからだとする(いまではそのように評価していないという)研究者の意見も正確ではない。なぜなら、両国の制度的な教育は世俗的であるばかりでなく、トルコ・リセに多くの保護者が子どもを入学させようとする理由が、学力の向上にあったからである。しかも、手厚い奨学制度も魅力である。つまり、ソ連時代の学歴信仰が、機動力なのである。世界中の PISA 信仰もこうした傾向を支援したであろう。しかし、イスラームにもとづく行動様式が、隠れたカリキュラムとして機能していることも明らかになった。

(5) 教育の脱イデオロギー化は、ソ連から独立した諸国における共通の課題であるが、ソビエト教育の否定度が、ロシアの教育関係者に比べ、グルジアを除く調査対象国ではやや穏やかで、特に、欧米への留学経験者や国際機関で勤務する人々においては、予想に反して、自国の伝統とソビエト教育および支配的な欧米の教育観の相対化がなされていた。国際機関で働いている人々への聞き取り調査によって、ソ連の教育制度・内容・理論がどのように摂取され、あるいは批判されているかを知ることができた。ロシアを中心としたこれまでの研究では明かされなかった、独り立ち戦略をめぐるバランスのとれた、冷静なソ連分析・解釈が浮上した。もちろん、アメリカの機関で働く現地スタッフにはアメリカ一辺倒の人もいないわけではない。

(6) ソビエト教育の正の遺産として機能しているのは、学校外教育施設であることも明らかになった。名称はイデオロギーを彷彿させるものから変更されたが、優秀な指導者の存在や個性を発達させる多様な活動メニューは生き続けている。

(7) アメリカバーモント州にある国際 NPO 「PH International」(旧 Project Harmony) 本部での Executive Director へのインタビューによって(2009年3月)、PH International の取り組みと支援の方針を聞くことができた。PH International は現在、コーカサス地方を中心に6各国で開発援助事業を行っているが、その方針は西洋文化の移入といった批判を考慮し、特定の知識・価値観を注入するのではなく、コミュニティ意識を高めることに重点をおいているという支援方針を聞き出すことができた。とくに、ローカルな拠点にコーディネーターを探し出し、リーダーシップの育成に重点を置いていることが明らかになり、コーカサスでの援助戦略が裏

付けられた。

(8) 移動が、人の育ちにとってもつ意味を解説した。研究対象地域では、経済発展が順調ではなく、そのため就業機会が少ない。そのため職を求めて移動せざるをえず、まずロシアへ、ヨーロッパへ、カザフスタンへと移動する。カザフスタンでは、国家政策にもとづく帰還民の問題がある。こうした移動が、独り立ち戦略に深刻な影響を与えることが明らかになった。移動を余儀なくされる階層(民族)にとって教授言語と外国語習得の問題が極めて重要なことは言うまでもない。

研究対象諸国は、国民づくりとエリート養成に同時に取り組み、欧米諸国や国際機関、NGO などの支援を受け西洋的な国民教育制度を再編した。その結果、教育の格差問題が深刻化した。

西洋的な教育制度を介した学力と学歴による進路選択と自己実現という独り立ち戦略が、教育のヘゲモニーとなっている。そこから外れる人々の支援は薄い。社会主義時代のような経済資産の差が少なく、階層や民族や地域の違いの、教育制度を介しての進路などへの反映の抑止・縮小策はとられていない。

教育をめぐるヘゲモニーに沿った独り立ち戦略を主軸にした発達文化を生きる人々には、グローバル・エリートへの意欲は強くとも、国民的アイデンティティへの意識は薄い。そこで、国民意識の形成が課題となる。これまで言い伝えられてきた民話や神話の活性化、英雄の位置づけなどに注意が向けられているのは、そのためである。こうしたアイデンティティ形成の方向付けは、景観や記念碑、博物館の展示が示唆する自画像などからも読み取れる。

(9) 西洋的な近代化が席卷することに危惧をいだく研究者もいる。新しい社会への危惧は、そうした社会を支える人づくりへの危機

意識でもある。西洋的な教育と社会の近代化に、自分たちの歴史と自前の文化が色あせるのではないかとの不安はぬぐいがたく、もうひとつの、いわば、西洋的な典型的な近代化とは異なる、例えば、民族的な近代化を模索する研究者もいる。

(10) 文化圏は、地政学的な意味において存在する。しかし、おとなと子どもの独り立ち戦略においては、文化圏の括りは規定的ではないことも明らかになった。同時に、中央アジアの遊牧地域に由来するノマド的な発達文化の手掛かりを得るという収穫もあった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計19件)

- ①関啓子、グルジア(「ユーラシアの暮らしと経済」)、新聞『日本とユーラシア』(2010年1月15日発行)、査読無、2010年
- ②関啓子、南コーカサスにおける文字の問題、日中教育研究交流会議『研究年報』、査読無、第18・19号合併号、2009年、pp. 26-32
- ③関啓子、強制収用とせめぎ合う自然保護市民運動、現代と保育、査読無、第73号、2009年、pp. 112-113
- ④中田康彦、教育政策における免許更新制の位置、教育、査読無、第759号、2009年、pp. 73-80
- ⑤内藤正典、西欧とイスラームの衝突—主要な言説の再検討、現代宗教2008、査読無、2008年、pp. 65-79
- ⑥内藤正典、トルコ共和国の根幹—絶対不侵と世俗主義の現在、別冊『環』、査読無、第14巻、2008年、pp. 67-78
- ⑦内藤正典、対テロ戦争の誤認がもたらした中東の不安定化—イラクの分裂、トルコ世俗主義の危機、世界、査読無、No. 782、2008年、pp. 229-239
- ⑧澤野由紀子、諸外国の国語教科書の分析—ロシア、初等中等教育の国語科の教科書及び補助教材の内容構成に関する総合的、比較教育的研究、査読無、2008年、pp. 50-73
- ⑨中田康彦、新教育基本法下の教員政策—行政制度(政策)改革を中心に、日本教育政策学会年報、査読有、第15号、2008年、pp. 122-132
- ⑩中田康彦、教師の職務に関わる自由の論理—西原理論の批判的検討—、人間と教育、査読無、第58号、2008年、pp. 72-79

- ⑪中田康彦、内閣における文部行政の位置、教育、査読無、第755号、2008年、pp.13-20
- ⑫中田康彦、GPAは何を生むか、新英語教育、査読無、第471号、2008年、pp.6-6
- ⑬中田康彦、郷に入っては郷に従えというが…どちらがお先？、新英語教育、査読無、第472号、2008年、pp.6-6
- ⑭関啓子、クルグズスタンの教育改革と国民形成、ロシア・ユーラシア経済、査読有、No.902、2007年、pp.25-35
- ⑮中田康彦、教育制度改革をめざす“学校力”“教師力”“人間力”を考える、教育制度学研究、査読有、第14号、2007年、pp.42-53
- ⑯関啓子、環日本海生涯学習フォーラム（共同執筆）、山梨学院生涯学習センター研究報告、査読無、第18輯、2007年、pp.40-41、p.66
- ⑰中田康彦、小学校のカリキュラム改革、クレスコ、査読無、第70号、2007年、pp.40-41
- ⑱中田康彦、信教の自由と多文化共生、クレスコ、査読無、第71号、2007年、pp.38-39
- ⑲関啓子、グルジアにおける人間形成～比較研究の試み～、ロシア・ユーラシア経済調査資料、査読無、No.937、2006年、pp.28-37

〔学会発表〕（計8件）

- ①関啓子、平和と和解の研究センター「CsPRの森」シンポジウム『『農といのちと』パネリスト、平和と和解の研究センター「CsPRの森」シンポジウム『『農といのちと』、2009年12月16日、一橋大学
- ②関啓子、比較発達社会史の観点から、日本学習社会学会公開シンポジウム「学習社会における『不平等』について考える」、2009年9月6日、龍谷大学（京都府）
- ③内藤正典、Democracy or Secularism, The Liberal Paradox in Turkey、マルメ大学・一橋大学21世紀COE共同シンポジウム、2008年6月15日、マルメ大学（スウェーデンマルメ）
- ④内藤正典、Orta Doğudaki Güvenliği ve Türkiye'nin Rolü（トルコ語）、トルコ共和国統合参謀本部国際戦略研究センター主催国際シンポジウム、2008年6月5日、イスタンブール（トルコ共和国）トルコ共和国統合参謀本部士官学校
- ⑤Keiko Seki、La función del Día de la Independencia en la formación del ser humano: análisis comparativo entre México y Kirguistán、Taller Imágenes, educación y nación: Un diálogo japonés-mexicano en torno al día de la independencia mexicana、2007年11月5日、El Colegio de México
- ⑥Keiko Seki、Educational Reform in Human Resources Development Arena: A Comparative Study of the Caucasus Countries and Central Asia、International

Science Conference III, Comparative Pedagogy in Perspective of International Cooperation and European Integration、2007年10月18日、BREST, Republic of Belarus

- ⑦関啓子、祝祭（独立記念日）の人間形成機能をめぐって～メキシコとクルグズスタンの比較考察～、日本学習社会学会、2007年9月10日、常葉学院大学
- ⑧関啓子、コーカサスにおける人間形成の比較研究、ジャパンファウンデーション異文化理解講座「文明の十字路口：コーカサスの諸相」、2007年6月25日、ジャパンファウンデーション国際会議場

〔図書〕（計11件）

- ①関啓子、東洋書店、アムール・トラに魅せられて、極東の自然・環境・人間（ユーラシアブックレットNo.144）、2009年、p.64
- ②関啓子、太田美幸（共編著）、東信堂、ヨーロッパ近代教育の葛藤 地球社会の求める教育システムへ、2009年、pp.121~140
- ③御代川貴久夫、関啓子（共著）、世界思想社、環境教育を学ぶ人のために、2009年、pp.1-80、pp.209-269
- ④関啓子、彩流社、（一橋大学社会学部編）人と社会 つながりの再発見 コミュニケーションの変容、2009年、pp.21-43
- ⑤内藤正典、集英社、イスラムの怒り、2009年、p.240
- ⑥内藤正典（編著）、明石書店、激動のトルコ、9・11以降のイスラームとヨーロッパ、2008年、pp.7-19、pp.22-39、pp.269-284
- ⑦澤野由紀子、明石書店、揺れる世界の学カマップ、2009年、pp.24-49、pp.74-78、pp.158-187
- ⑧中田康彦、勁草書房、（久富善之編著）教師の専門性とアイデンティティ 教育改革時代の国際比較調査と国際シンポジウムから、2008年、pp.51-77
- ⑨内藤正典（共編著）、日本評論社、（共編著）『人の法 vs. 神の法』、2007年、pp.2-28、pp.130-153、pp.181-203
- ⑩内藤正典、朝倉書店、矢ヶ崎典隆・加賀美雅弘・古田悦造編『地誌学概論』（担当「第12章 中東」）、2007年、pp.112-122
- ⑪関啓子、明石書店、『コーカサスを知るための60章』（北川誠一・前田弘毅・廣瀬陽子・吉村貴之編著）、2006、pp.278-282

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関 啓子 (SEKI KEIKO)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：20107155

(2)研究分担者

内藤 正典 (NAITO MASANORI)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：10155640

中田 康彦 (NAKATA YASUHIKO)
一橋大学・大学院社会学研究科・准教授
研究者番号：80304195

(3)連携研究者

澤野 由紀子 (SAWANO YUKIKO)
聖心女子大学・文学部・教授
研究者番号：40280515
(H18→H19：研究分担者)